

言葉のもととは心

鳥取県 吉祥院 住職 湯浅英利

コロナ禍は、私たちの生活に大きな変化をもたらしました。そのうちの一つに、人と人との「コミュニケーション手段の変化」があります。コロナ禍以前は、会って顔を見て会話をするのが当たり前のことでした。しかし、コロナ禍で人に会って話をする事に制限が加わり、思うようにコミュニケーションが出来なくなりました。

その中で急速に普及したのが、パソコンや携帯電話でのビデオ通話によるコミュニケーションです。互いの顔が画面に映し出される会話は、音声だけより、さらに気持ちを伝えやすくなりました。

私たちは、自分の気持ちを伝えたい時、思っていることを表現し、伝えようとします。そして思いを伝えるために言葉を選び、より深く自分の心を映したものを声にします。そんな時、目に映る相手の雰囲気を読みとることで、お互い言いたい内容が深い部分まで伝わり、心と心がふれあい通じ合うことがあります。まさに、言葉は自分の分身のようですが、これにも限界があることを、多くの人がわかっています。

言葉は心に思っていることそのままではなく、心に似たものなのです。それでも私たちは、自分の表現したい心を伝えるために、さまざまな手段を用いることで、より深く思いを伝えようとしてきました。それは「言葉のもととは心」だからです。

お釈迦様はお弟子様に「ものごとは心にもとづき、こころのように疾く動く。もしも清らかな心で話したり、行動したりするならば、福楽はその人につき従う。影がそのからだにつき従って離れないようなものである」とお説きになりました。

心と体は切っても切り離せない関係にあります。清らかな言葉は清らかな心を育て、清らかな心は、私たちの言葉を真に清らかなものにしてくれます。できることなら、オンラインの会話も清らかな心と心、言葉と言葉とがつながり合うツール、道具であってほしいのです。

みなさんは、「以心伝心」という言葉をお聞きになったことがあると思います。これこそ、言葉を越えた対話を言い表しています。どんなに対話の方法が進歩しても、伝えたい内容が同じならば、互いに清らかな心で接することで心はより通じるはず。いくら甘美でたくみな表現を知っていても、うそや偽りの心では対話になりません。

時代や伝える手段は変わりますが、「言葉のもととは心」であり、人となりが大切だといえます。コロナ禍が、大切なことを再確認させてくれたように思いました。